

浦賀文化

平成 21 (2009) 年 7 月 1 日

第 19 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター) 〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 TEL&FAX 046-842-4121

☆ 江戸屋半五郎関連の石造物 ☆

① 「法界万霊塔(六字念仏塔)」

寛政4年、安山岩製、重頭角柱型、塔身高さ165cm、前面幅41.8cm、側面幅41cm、基礎高31cm、基台高35cm、刻まれている文字は、前面「南無阿弥陀佛」(明頭山祐天寺六世得誉祐全の書)、右側面「法界一切恩怙怨敵諸群靈等」、左側面「大誉果向深心信士 俗名伴五郎」



② 西叶神社に寄進した「漱水盥」

寛政元(1789)年、安山岩製、高86cm、上辺幅152cm、上辺側面幅79.5cm、底辺幅139cm、底辺側面幅67cm、前面に大きく「漱盤」(隸書体)、前面左下に「江戸屋半五郎」と刻まれている。



③ 常福寺の「大乘妙典六十六部供養塔」

寛政4年、安山岩製、尖頭角柱型、高89.5cm、前面幅33cm、側面幅32cm、基礎高23cm、基台3段高64.5cm、底辺幅130cm、刻まれている文字は、正面右に「天下和順」、中央に「奉納大乘妙典六十六部供養」、左側に「日月清明」右側面に「総願主 江戸屋半五郎 深心法子」



④ 常福寺の「地蔵菩薩像」(元禄7(1694)年)、安山岩、像高(台座含む)87.5cm、基礎74cm、基台(3段)高70cm、刻まれている文字は、正面左に「増上寺大僧正」中央に「南無阿弥陀仏 嶺誉(花押) 右に「授誉願主深心法子」



うらがの寫眞館

深本の墓は本名、石渡家(江戸屋は屋号)、後に鈴木家の墓域になく、常福寺の第二十九世光誉上人の墓の隣に並んで建っている。それは深本が光誉上人に帰依師事したためという。つまり師弟の間柄であったからだとされている。

常福寺の深本の墓

安山岩製、平頭角柱型、基礎、基台三段、前面右に「夢光常真信士」、真中に「大誉果向深本法子」(本は心の字の上に彫りなおしたため読みにくい)、左に「心誉兼月法尼」と刻まれている。

東西風

ペリーが来航して百五十年が過ぎ、日本は着実に近代へ向けた歩みを進めていた。浦賀の町は外国との交渉の場から外れていったが、徐々に形が出来てきた幕府海軍の基地の様相を呈してきた。日米通商修好条約が締結されると、その批准書交換のための使節が送られることになった。この機会に幕府海軍の腕試しにと供奉艦を送ることになった。この整備のためにドックが造られた。これが日本で最初のドライドックであり、近代造船界でも画期的なことであった。安政七年(一八六〇)一月、咸臨丸は幕府使節を乗せたポーハタン号より一足先に出航するたため、浦賀港で最後の補給と休息をとって、出航した。この出来事から百五十年になる来年二月に浦賀文化センターで特別展を開催する準備が始まった。

(山本)

法界万霊塔(六字念仏塔)

波瀾万丈の人生 僧・深本

東林寺登り口石段の傍に大きな石塔があります。波瀾に満ちた生涯を送った僧・深本(しんほん、江戸屋半五郎)が建てたこの石塔に刻まれている「南無阿弥陀佛」の六文字にはどのような思いが込められているのでしょうか。

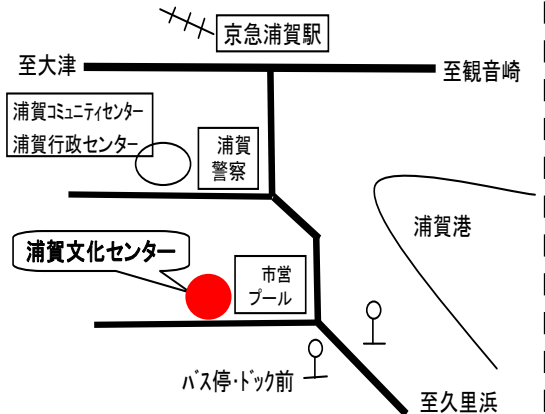
十八世紀後半の港町・浦賀、江戸の流行にも敏感で、賑わい、華やかなこの港町で五軒認められていた遊郭の繁栄は大層なものでした。その中でも、江戸屋半五郎の遊郭は一段と大きく、贅沢で華美なものでした。しかし、この贅沢と華美な造りが半五郎の後半生を、遊郭の主から僧侶へと転身させる要因になるとは誰が想像できたのでしょうか。

豪華は、若いころから近隣に知れ渡っていましたから、この命令は衝撃であったでしょう。この後に江戸へ出た半五郎は一人のある僧侶の教えから、自分がいかに無常な人生を送ってきたかを知ることになります。

「深本」と改めました。晩年に浦賀に戻った深本は、現在の浦賀警察署の脇にあった地藏堂の堂守をして念仏三昧の日々を送り、念仏の声が途絶えたとき、文化六(一八〇九)年四月十九日、六十一才の波瀾に満ちた人生の幕が降りました。

浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター)

浦賀駅から徒歩10分



所在地:横須賀市浦賀7-2-1
電話: 046-842-4121
FAX: 046-842-4121

浦賀の植物

ウバメガシ (ブナ科)

ウバメガシは暖温帯の照葉樹林の優占種で海岸に多く自生します。九州・

四国・和歌山から伊豆半島そして三浦半島が北限とされています。横須賀風物百選に『明神山の素晴らしさはよく保全された自然林で木々の種類も豊富なこと。特に東葉神社には、ウバメガシの自生は県内でも分布の北限とされている。』と記されていますが、現在は植栽と考えられていますが、小田和湾岩崎山が生育状況から見ても、

確実に分布域の北限に位置するといわれています。千葉県勝浦市八幡岬と鋸南町岩井袋の二か所にも自生が確認されていますが、三浦半島の岩崎山のほうが少し緯度が北に位置しますので自然分布の北限となりました。(千葉中央自然誌研究報告、25-30、March2004)

植栽されたと考えられる東葉神社・明神山のウバメガシを今年の五月に確認しましたが、一本は地際の幹回り100cmほどあり、高さ50cm辺りから三本に枝分かれし、それぞれの胸高周囲は四十〜五十cmもありました。高さは七〜八mぐらいあるでしょう。他の樹種と隣り合っているためか、光を求めているためか枝張りや通常の樹形とは異なっていました。花は当地では五月ころに新枝の葉がでると同時に咲き、黄色がかつた雄花は新枝の下部に長く垂れ下がります。ピンク色をした雌花は新枝の



県指定天然記念物「叶神社の社叢林」の五十センチから枝分かれしているウバメガシ

大前悦宏 神奈川県植物誌 調査委員会

上部の葉腋に数個つきます。葉は互生で、葉柄は五mm、楕円形で葉の先は尖ります。葉の大きさは、カシの仲間より一番小さく、長さ3cmから大きくても5cmぐらいい、葉の上面は光沢があり、葉の上半部は鋸歯縁。下半部は全縁となっていて、ルーペで見るとはつきりわかりませんが、葉の縁が半透明の線で縁取られています。果実の成熟には二年かかります。自生の場所は海岸の急斜面の岩場や崖の瘦

いるだけでなく幹も枝も曲がっているものが多いのが特徴といえます。ウバメガシの自生の例外は50kmも内陸にある兵庫県西脇市のものがあります。中国では内陸の四川省に群落があることから、中国の研究者は日本の海岸に自生する方が珍しいという。

植物学でカシの仲間はブナ科ユナラ属をいい、落葉性のユナラ亜属(常緑のウバメガシも含みます)と常緑性のアカガシ亜属とに識別されますが、両者を属の階級で区別することもありません。常緑樹のスタジイ・アラカシ・マデバシ・シラカシなどは春に発芽し、落葉樹のカシワ・クヌギ・ユナラなどは秋に発芽しますが、常緑樹のウバメガシも秋に発芽し、性質・形態・生態的地位も落葉性の種類と同じグループに含まれます。

やがて東葉神社のウバメガシも乾燥、そして風雪をしのいで成長し、立派な老樹になり万年の寿を祈りうるものになってほしい。

笑話一題

新緑に誘われて、同窓生九人で五十年ぶりに修学旅行先の日光へ。当時のアルバムを手に写っている場所を尋ね再現する旅。山・川・湖・草木はほぼアルバムそのままだった。が、被写体を見ると、肝心の人物が大きくさま変わり。当時の美少年、美少女が、華厳の滝、戦場ヶ原の中、東照宮陽明門の前と居座つ

たが、あゝ、何とバツクが美し過ぎるのか。余計に過ぎ去った年月を感じざるを得ない。それでも色とりどりの草花、景色に慰められ、建築物や彫刻を心ゆくまで堪能することができた。浦賀にも西葉神社や八雲神社、東耀稲荷に素晴らしい彫刻があると。今一度じっくりと見てみようと思う。



◇★為朝神社の虎踊★◇

(県指定重要無形民俗文化財・民俗芸能)

毎年6月第2週の土曜日、祭礼で奉納される「虎踊」。下田奉行所が浦賀に移転したときから始まり、歌舞伎「国姓爺合戦」を工夫し唐人踊りを取り入れたといわれている。主人公の和藤内(武将姿の男子)の呼掛けで、華やかな衣装の女子の「唐子踊り」、全長2mもある虎の親子の「虎返し」などの曲芸の後、大暴れの虎を和藤内が成敗し「カッピキュー」と見栄を切り打ち止め。今年6月13日に奉納されました。

千鯛問屋にライバル出現



歴史 語りい座・浦賀 ⑬

郷土史家 山本 詔一

寛永十九年(一六四二)東浦賀の千鯛問屋は、問屋職となった。このことは千鯛問屋が一般の問屋とは違い、幕府が認可した特権的な問屋となつたことを示すものである。それは千鯛流通が増大し、幕府が監視できない状況になってきたことを表している。

この時代の浦賀の千鯛問屋がどれほどの商いをしてきたのか数字で示すことはできない。しかし、「浦賀事跡考」には「寛永より元禄まで繁昌にて、就中千鯛問屋杯も十五軒に相定り、千鯛に限らず何にても十五軒の問屋にて水揚・船積とも売買いたし候(中略)其後またまた千鯛問屋相増し、十九軒に相成、いずれも富家にて万両以上の身緒沢山に有」と記されている。

とが窺え、十九軒が増えたがその財力は万両以上を持つ家が沢山であると記している。この資産は現在でいうと十億円以上になり、それだけの財産を持つていた十数軒の問屋が狭い東浦賀で軒を並べるように生活していたと想像すると、千鯛問屋魂るべしの感があり、しかもその財産が数十年で得たものであることを思うと、どれだけ活気あふれる町であったのか、現在の様子からはイメージが湧いてこない。

この記事をみて、千鯛問屋が浦賀の維持管理一切を引き受けたいと申し出た。

このことを知った東浦賀千鯛問屋は、西浦賀の千鯛問屋開業を反対し、勝浦の市郎左衛門が提示した開業の条件をすべて受け入れて生き残りを図った。



西浦賀の親水公園から見る東葉神社

この西浦賀千鯛問屋開業反対に東浦賀のすべてのお寺はカンパをして、千鯛問屋にエールを送った。しかし浦賀村の鎮守叶明神は、西浦賀にあることも影響したのであるのか、ついにカンパもエールも送らなかつたという。